

図書館だより・きょういく

2008(平成20)年8月1日発行

滋賀大学附属図書館教育学部分館

国語教科書 - 明治から現代まで -

大田 勝司

はじめに

井上敏夫氏は「国語教科書の変遷」(『国語教育科学講座 第5巻 国語教材研究論』全国大学国語教育学会編 明治図書昭和33年5月)において、明治5年の「学制」頒布以降太平洋戦争後に至るまでの小学校で使用された国語教科書は次のように区分されるとしている。

- 1 自由編纂時代(明治5年の「学制」頒布から同18年まで)
- 2 検定制時代(明治19年の「教科用図書検定条例」の制定から同35、6年まで)
- 3 国定教科書時代(明治36年の「小学校令」改正による国定教科書制の実施から昭和23年の教科書検定制の実施まで)
- 4 新検定制時代(昭和24年から新検定制教科書使用の時代)

上記の時期区分については、年代の区切り方についての問題、すなわち、例えば第1回の国定国語教科書は明治36年8月から順次刊行され、翌37年4月には全国一斉に使用されることとなったことからいえば、検定制時代はその終了年を明治36、

7年とすべきであろうこととか、本書の発行年が昭和33年5月ということで、新検定制時代については考察の対象から外しているなどの問題があるが、教科書制度の変遷から考えると、基本的には妥当と考えられるので、以下、この時期区分にしたがって国語教科書の歩みを追っていきたい。

ただし、明治33年8月公布の「小学校令」および「小学校令施行規則」によって「国語科」という教科が初めて成立するまでは、厳密な意味では国語教科書というものも存在しないので、国語教科書といっても具体的に何をさすのかという問題があるが、その時期以前においては、国語科の内容に該当するものによってみていくことにする。また、本稿においては小学校国語教科書についての歩みを中心とし、中等学校の国語教科書については、上記の時期区分にはそのまま該当しないが(例えば国定教科書としての時期は昭和18年から始まるなど)、別途に時期区分をすることはしないで、上記の時期区分のなかで適宜紹介していきたい。

以下、各時期の特徴をふまえながら、それぞれの時期における代表的な国語教科書

を取り上げていきたい。

1 自由編纂期

「学制」頒布によって示された教科のなかでのちの国語科の内容に相当するものとしては、「綴字(かなつかひ)」「習字(てならひ)」「単語(ことば)」「讀本」「書牘」などがあるが、「小学教則」に指定されている教科書をみてみると、たとえば「讀本讀方」では、『西洋衣食住』『學問のすすめ』などがあげられており、国語科独自の要素よりも、学校教育から遊離した一般社会人向けの啓蒙的な内容・知識の要素が色濃い。また、他の教科の教科書にしても、西欧の影響の強いものや寺子屋時代に使用された往来物の踏襲が目につく。

「綴字」は、かな文字およびかな表記法を習得させるための、「単語讀方」は、漢字および漢字によって表記された語句を学習するための教科であり、以後の国語教科書入門編の原型をなすものとなった。

『絵入智慧の環』(明治3～5年)『ちゑのいとぐち』(明治4年)は、ともに古川正雄の手になるもので、いずれも明治5年9月に発表された文部省小学教則の下等小学校第8級(第一学年前期)用の綴字の教科書として指定されている。

『絵入智慧の環』は4編8冊からなり、「初編上」は「詞の巻」、「二編上」は「万国尽の巻」、「三編上」は「大日本国尽の巻」、「四編上」は「名所の巻」となっていて、名所のひとつとして近江もある(写真1参照)。



写真1 『絵入智慧の環』

なお、「下」はすべて「詞の巻」となっていて、上述の「綴字」の教科書としての性格をよく表している。

『ちゑのいとぐち』(写真2参照)は、全一冊であり、『絵入智慧の環』の姉妹編ともいえる入門書である。ひらがないろは、同濁音、かたかないろは、同濁音の表ののち、「ひとよみきり」から「さんじうよみきり」までという30章立てとなっており、単語から語句、そして文という構成順序をとっている。



写真2 『ちゑのいとぐち』

自由編纂期における教科書としては、ほかに、文部省の編纂による『単語篇』(明治5年)、田中義廉の『小学讀本』(明治6年)、榊原芳野の『小学讀本』(明治6年)や若林虎三郎の『小学讀本』(明治7年)などがある。

2 検定制度期

明治5年の学制頒布以降続いていた教科書の自由採用は明治19年の小学校令により検定制度に移行することとなった。この検定制度により、教科書の国家的な統一と旧式な教科書の整理とが促進されることになったが、この検定制度実施にあたって、文部省は教科書の基準を示すために、模範教科書を編集刊行することにし、ドイツの入門書にならって、画期的な入門書を作り

上げた。『読書（よみかき）入門』（明治19年 1冊）がそれである。これにより、以後の読本編纂の基礎が定められたといわれている。すなわち、カタカナ先習、読み書き同時学習の伝統の確立、また、従来の実学的・知識的なものから、文学化・児童化への転換を促したとされる。写真3は、第12課で、濁音がはじめて出てくる課である。さらに、本書に続く模範教科書として、『尋常小学読本』（明治20年 7冊）『高等小学読本』（明治21・22年 7冊）が刊行され、体系的な読本として完成する。



写真3 『読書（よみかき）入門』第12課

『尋常小学読本』は、『読書入門』について使用されるものとして編纂されたものであり、従来は各学年ばらばらの編纂であったのに対し、小学1年から4年に至る児童の能力にあった易から難への教材の配列がなされた点に画期的な意味が見いだされる。

口語体（談話体）を多く取り入れ、教材の多種多様な点において特質がみられるが、一方、教材のほとんどは、修身、地理、歴史に取材したもので、忠孝、勤勉、立身などの徳目を説いた、国家主義的性格の強い内容になっているという批判もなされている。（写真4参照）



写真4 『尋常小学読本』

一方、民間教科書にも優れたものがいくつか刊行された。『帝国読本』（明治25年 8冊 学海指針社）『尋常国語読本』（明治33年 8冊 金港堂）などであるが、その中でも、『国語読本 尋常小学校用』（明治33年 8冊）は、特に注目される。文学者坪内雄蔵（逍遥）の編集によるもので、文学的香りの高い名著とうたわれている。口語文の重視、リズム感のある表現、知識教材における比喩表現などの文章表現、さらに児童の生活に多く題材をとっていることなど種々の点で注目される。写真5は、巻3の第1課で、上記の特徴の一端をよく示している。



写真5 『国語読本 尋常小学校用』 巻3の第1課

3 国定教科書期

前項にあげた一部の教科書を除いた多くの民間の教科書の質の低劣化に加えて、明治35年の末から翌36年にかけて発生した教科書疑獄事件が一つの端緒となって、明治36年より教科書は国家による教育統制を強く打ち出した国定制となった。

なお、中等学校の国定制は昭和18年からである。

国定教科書は第1期から第6期にわたるが、このうち、第1期から第5期の特色を『教科書の歴史』（唐沢富太郎 創文社 昭和31年）では次のようにとらえている。

第1期国定教科書（明治36年 - 明治42年）

資本主義興盛期の比較的近代的教科書

第2期国定教科書（明治43年 - 大正6年）

家族国家観に基づく帝国主義段階の教科書

第3期国定教科書（大正7年 - 昭和7年）

大正デモクラシー期の教科書

第4期国定教科書（昭和8年 - 昭和15年）

ファシズム強化の教科書

第5期国定教科書（昭和16年 - 昭和20年）

決戦体制下の軍事的教科書

また、同書の各期における国語教科書の内容分析によると、次のような特徴も見いだせる。（注）第6期については、戦後に発行された。詳しくは後述。

教材内容	時期区分					
	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期
文学的内容	32.8%	38.7%	51.5%	54.1%	48.1%	80.5%
歴史的内容	10.9%	12.3%	13.8%	15.0%	11.1%	(記載なし)
科学的内容	37.2%	30.0%	22.0%	17.9%	17.1%	6.5%
社会的內容	3.9%	6.0%	5.0%	2.3%	2.3%	2.6%
ナショナリズム的内容	3.4%	4.0%	2.6%	3.3%	4.3%	0.7%
ミリタリズム的内容	7.5%	4.0%	2.6%	5.5%	14.4%	0%
生活的内容	3.8%	5.0%	2.6%	1.9%	2.6%	9.7%

国定教科書期については、上記の時期区分に従い、以下各期の特徴をみていきたい。

1 第1期国定国語教科書（『尋常小学読本』明治37年 8冊）

「国定教科書編纂趣意書」によると、「本書ハ発音ノ教授ヲ出発点トシテ、児童ノ学習シ易キ片仮名ヨリ入リタリ。」とあって、発音教育、標準語教育に力を入れようとする言語教育的教科書としての基本的性格をもっていた。そのことは、巻頭の「イ」「エ」「ス」「シ」という4字についてみても、「イ」と「エ」、「ス」と「シ」という訛音矯正の意図が表れていて、語法を主とした編纂法であるといえる。（写真6参照）この点では、『読書入門』以来の編纂法と大きく異なっているとはいえないが、より組織的に論理的に編纂されているとの評価も一方ではなされている。また、口語文体を大幅に採用し、新鮮味も加えている。

しかしながら、内容的には『教科書の歴史』にみられた前表のように文学的色彩は薄く、児童の興味・関心をひきつけるものとはいえなかった。



写真6 『尋常小学読本』

2 第2期国定国語教科書（『尋常小学読本』明治43年 12冊）

明治40年の小学校令改正により、尋常小学校の年限が4年から6年に延長になったこと、明治33年に制定された字音仮名遣、仮名字体、漢字等に関する規定が明治41年に削除されたこと、日露戦争を経て帝国主義的時勢になり教材に訂正を要するところが出てきたことにより、国定国語教

科書も第2期を迎えることとなる。

特徴としては次の点があげられる。

* 旧読本の字音かなづかい（表音棒引）を歴史的かなづかいに改め、漢字数を増加させた。

* 基本的には語法的編纂法を踏襲しているが、文学読本的色彩も強くなった。

* 国民的行事、習慣、趣味に関する教材（「ワラ」「ヒナマツリ」「家の紋」など）を増やすとともに、国民的童話、伝説、神話（「コブトリ」「ウシワカマル」「天ジンサマ」「ハナサカチヂイ」など）を多く採り入れ、文章にも名文（「吉野山」「瀬戸内海」「画工の苦心」など）が多く、韻文にも格調の高い、趣味の豊かなもの（「春が来た」「水師營の会見」「我は海の子」など）がいくつもあったが、一面、国家主義的精神高揚のための文学が数多くみられる。

* 軍国主義的教材（「広瀬中佐」「水兵の母」「靖国神社」「日本海海戦」など）には日露戦争の影響が強くみられる。

3 第3期国定国語教科書（『尋常小学読本』『尋常小学国語読本』大正7年 各12冊）

使用期間は全5期中最長で、さまざまな特徴のみられる教科書である。

この期には二種の教科書が同時に発行され、使用された。

『尋常小学読本』はいわゆる黒表紙本、『尋常小学国語読本』はいわゆる白表紙本とよばれた。黒表紙本は旧読本の修正増補的な色合いをもち、文章の平易化、文学趣味化などの特徴はみられたが、本質的に大きな変更はないといえる。一方、白表紙本は、自由な編纂法を採り、教材を新しく求めたために、新鮮さ、多様さに富む。そのため、『初等教育国語教科書発達史』（秋田喜三郎 文化評論出版 昭和52年〈昭和18年稿〉）では、「本書（白表紙本）

は児童生活を主としたから、教材文章は児童に親まれ、非常に歓迎せられた。」と述べ、「国語教育の回顧と展望 - 読本編集三十年 -」（井上超『国語教育講座 第5巻 国語教育問題史』刀江書院 昭和26年）では、「（白表紙本は）同じ期間の黒表紙本にくらべて格段の人気があり、全国各県の三分の二が白表紙であった。」と述べている。

以下、白表紙本について特にその特徴を評してみたい。

編集のしかたとしては、黒表紙本が課数を増やしたり、教材を量的に増やしたりすることによって分量の増加を図ったのに対し、白表紙本は長文を多くする質的増にその特徴がみられる。したがって、弾力性ある教材選択がなされ、その文章も緩急自在の変化に富んだ口語文が多く、また、文の提出を早くして、いわゆる文章主義を徹底させている。

表現法においても、従来の読本の文章では叙述や説明が多かったのに対し、描写を重んじた新鮮味のあるものが多くみられ、対話文も目立つ。

内容的には、児童自身を主人公としている多くの長文の文章や、童話・童謡など児童が興味を持つ文学教材（「犬ころ」「磁石」「日本の高山」「入営した兄から」など）を多く採用し、また外国紹介あるいは外国人を主人公とした国際的な視野にたった教材（「アメリカだより」「ヨーロッパの旅」など）も目立つ。

4 第4期国定国語教科書（『小学国語読本』昭和8年 12冊）

巻頭は五十年来の範語をすてて、「サイタ、サイタ、サクラガサイタ。」という文で始まっており、いわゆる文章法を初めて採用したことは、大正中期以降教育現場では既に実践されていたこととはいえ、国語教育史上特筆されることである。また、従

来の単色の読本に比べ色刷りで、挿し絵も多く、童心に適した華やかさをもっており、現代の教科書に一段と近づいた体裁を採っているといえる。

さらに、文学的教材の比率が全五期中最も高く、対話的、劇的教材が多いことも大きな特色である。『初等教育国語教科書発達史』（前出）では、「文学的精神を本位としてゐる本書は、材料の選択および文章表現において感情・情意を重視してゐる。」と述べている。

しかし一方、次の第5期にみられる超国家主義、軍国主義の傾向をはらむものとして、危険な徴候もみられる。たとえば、「空中戦」「東郷元帥」「乃木大将の幼年時代」などの軍事教材、「天の岩屋」「国びき」「神武天皇」「羽衣」などの神話・古典教材、「シタキリスズメ」「サルトカニ」「浦島太郎」などの昔話・伝説教材が多く採られていることなどに表れている。

『教科書の歴史』（前出）では、この期の教科書について次のように述べている。

臣民の道を強化し、軍国における忠君愛国の精神の鼓吹を教育目的としたこの期の教科書は（中略）三期に始めて芽生えて来た大正期のデモクラティックな要素を伸長させる役割を放棄して、かえって相反する超国家主義教育を強要し、侵略戦争への国民の精神的な準備をなす一方、五期の軍国主義の教科書への道を敷設した。

5 第5期国定国語教科書（昭和16年）

昭和16年に「国民学校令、同施行規則」が公布され、8年間の義務教育となるとともに、従来の国語、修身、地理、国史を統合して国民科とし、国語は国民科国語として位置づけられた。また、「皇国民の錬成」ということが究極の目的とされ、国家主義的、軍国主義的色彩の濃いものとなる。

国語教科書は、第1期 初等科第1、2

学年 第2期 初等科第3学年 第3期
初等科第4、5、6学年 第4期 高等科
第1、2学年というように順次編纂された。
教科書名も、初等科第1学年は「ヨミカタ」、
「コトバノオケイコ」、初等科第2学年は
「よみかた」「ことばのおけいこ」、初等
科第3学年から第6学年は「初等科国語」、
高等科は「高等科国語」となる。

この中で、言語の教科書として初等科第
1、2学年に「コトバノオケイコ」（「こ
とばのおけいこ」）が作られたのは、言語
の力を取り立てて伸ばそうというねらいを
もった教科書が別建てで作られたといえる
が、ある意味では、第1期国定国語教科書
への復帰ともいえる。ただし、『初等教育
国語教科書発達史』（前出）においては、
「国民学校の国語教科書の一大特色は、従
来の教科書に比し、音声言語の指導を重視
したことである。」と全巻にわたる教科書
の方向性を評価する見解を記している。

読本系統のものについては、生活教材な
どにいくらかの新鮮味はみられるものの、
『教科書の歴史』（前出）に、「国語教材
の実に七六・四％が超国家主義の意図実現
の教材として用意されているのである。特
に、五、六学年においては、約九五％の多
きに達していることは驚くべきことであ
る。」とあるように、「ににぎのみこと」
「シンガポール陥落の夜」「支那の春」な
ど枚挙のいとまがない。

昭和20年8月、敗戦とともに、従来の
教科書の中から、「兵タイゴッコ」「にいさ
んの入営」「水兵の母」「シンガポール陥
落の夜」など数多くの国家主義的、軍事的
教材を削除、訂正するという形で教科書が
使用されることになった。いわゆる墨ぬり
教科書である。昭和21年4月からは、上
記の教材を削除したうえで、わずかな新教
材を加えた暫定的な教科書が使用された。

この教科書は、パンフレット教科書とも呼
ばれたように、新聞紙を流用した分冊形式
のもので、とても教科書とは呼べない代物
であった。もちろん、教材の組織、分量や
新出文字についても考慮されていなかった。

昭和22年4月からは、石森延男氏を中
心として編集された第6期国定国語教科書
が使用された。その特色として、『国語教
育史資料 第二巻 教科書史』（井上敏夫
東京法令出版 昭和56年）では、次の9
点をあげている。

- 1 ひらかな先習
- 2 巻頭における詩の提出
- 3 読みの材料の発展
- 4 表現様式の拡大
- 5 口語文体による平易化
- 6 児童作文の教材化
- 7 会話形式による文章表現
- 8 長文教材の提出
- 9 内容の近代化

この教科書の「こくごー」（第1学年前
期用）の冒頭には「みんないいこ」という
教材が載せられ、そのため、「よいこ読本」
とも呼ばれた。

（写真7参照）
この教科書は、
戦後すぐのもの
であることもあ
って、紙質も悪
く、挿し絵も少
なく、さらに彩
色もグリーンと
オレンジのみで



写真7 「よいこ読本」

なされるといった、外観としては極めて粗
末なものであったが、内容面では、先にあ
げた特色にもみられるように、戦前の教科
書とは面目を一新したものとなり、以後の
教科書編集に大きな影響を与えた。

4 新検定制度期

昭和22年9月、文部省によって教科書検定制度が発表され、さらに昭和23年4月には「教科用図書検定規則」が制定されることによって、昭和24年からは検定教科書が使用されることになった。明治37年から長期間にわたって用いられてきた国定教科書は、この時点で幕を閉じることになるのである。

以降、学習指導要領の改定のたびに、教科書は全面改訂され、今日に至ることになるわけであるが、その意味では、今日までの検定教科書の歩みは大きく6期に分けることができる。なお、第3期以降の教科書については、3年に1度部分改訂が行われてきたが、現在では通常4年に1度部分改訂が行われている。

第1期 昭和22年版学習指導要領（試案）

第2期 昭和26年版学習指導要領（試案）

第3期 昭和33年版学習指導要領

第4期 昭和43年版学習指導要領

第5期 昭和52年版学習指導要領

第6期 平成元年版学習指導要領

第7期 平成10年版学習指導要領

第1期の初年度（昭和24年）は、文部省著作教科書も検定教科書として使用され、民間の検定教科書が3種類だけであったこともあって、文部省著作教科書も多く採用された。昭和25年になると、民間の検定教科書も8種類に増え、以後次第に文部省著作教科書は減少の一途を辿り、昭和29年頃には姿を消すことになる。

なお、昭和24年には、文部省から入門期の「まことさんとはなこさん」「いなかのいちにち」「いさむさんのうち」という三部一連の教科書が発行され、第6期国定国語教科書に色濃く残っていた文学的色彩を言語生活主体のものとする編集がなさ

れ、彩色も豊かで挿し絵も多く、以後の民間の検定教科書の一学年用はこれにならうようになった。

第2期は、内容、構成とも第1期と大差はみられないが、第3期には、学習指導要領の学習領域が、「聞く、話す」「読む」「書く」の3領域に整理された影響を受け、教科書も言語生活を主とした単元構成が少なくなっていた。

第4期では、学習内容の精選と作文指導の重視という学習指導要領の強調点をふまえた教科書の編集が目につき、言語能力面への傾斜が一段と増した。

第5期の教科書で最も目につく変化は、1年生の教科書が大型化（B5判）したことである。そのため、入門期の教材提出にさまざまな変化がおこった。また、時間数削減に伴う教材内容の精選化、「言語事項」「表現」「理解」という学習領域の変更に伴う言語教材の強調、表現教材の工夫、関連教材の提出などの特色がみられる。

第6期においては、一部を除き小学校の3年生までの教科書が大型化（B5判）したが、基本的には第5期を継承した形で大きな変化は特にはみられない。

第7期（現行）では、いくつかの大きな変化がみられる。

まずは、教科書の大型化がさらに進み、平成13年検定版では、一部を除き小学校の4年生までの教科書が、そして、平成16年検定版ではすべての教科書がB5判となった。中学校においても、平成17年検定版では、一社を除きすべてB5判となった。

また、時間数が、第6期においては前期に比べ小学校1・2学年で週あたり1時間ずつ増加したが、第7期においてはすべての学年にわたって減少した。この点については、中学校においても同様である。このため、教科書の大型化に伴い、ページ数の減少

による影響はさほどみられないが、一単元および一教材の扱いの時間数がこれまでに比べ大幅に減少するという大きな変化が生じた。ただし、中学校では、教科書編集において、大型化を図った教科書の場合、巻末に資料編を設け、時間数の減少に対応した弾力的な扱いができるようにしている。一方で、ジャンルでみると、時間数の減少に伴い、たとえば平和教材が大きく減っているなどの現象がみられる。

さらに、「伝え合う力」が新たに目標に加わり、領域構成が「表現」「理解」から「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に変更されたことによって、教科書の単元構成、領域の比重のかけ方においても大きな変化が生じた。

このように、敗戦という一つの契機のもとに生まれた新しい国語教科書は、戦後60年という歩みの中で確固とした位置を占めてきているようであるが、問題点も多く抱えている。

資料としての教科書の位置づけの問題、単元構成を含む教材編成の問題、一つひとつの教材の適否などあげていけば数限りないが、ここでは、特に次の3点について触れておきたい。

一つは、教科書数の減少の問題である。新検定教科書の出発の時点では、前述したようにわずか3種類であったが、翌年には8種類、そして、それ以後、検定教科書の種類は増加し、昭和33年から35年にかけては20種類を数えた。ところが、昭和36年以降減少に転じ、現在ではわずか5種類の検定教科書しかない。中学校においても同様の傾向にあり、現在の教科書は5種類のみである。しかも、寡占化も目立ち、教科書の採択が広域採択制に変わったことともかかわって、地域性に合った、学習者の実態に合った教科書選択の余地は非常に

狭められてきているとあってよい。

一方、教科書の発行に関して、高校においては、小・中学校の教科書とは事情が大きく異なる。平成20年度使用の教科書では、たとえば、選択必修の科目である「国語総合」の教科書の場合、10社から計27種類が発行されている。このように数多くの種類が発行されているのは、高校の場合学力レベルが各学校において大きく異なるという事情が背景にある。また、高校の場合は各校で独自に教科書を採用していることも小・中学校と違う点である。

一つは、教科書の性格に関わる問題である。教科書は本来資料集としての意味をもっていると考えられるが、実際にはカリキュラムとしての要素も同時にもっている。つまり、教科書に掲載されている順番どおりに扱っていくことを原則としているのである。これでは教師の創意・工夫が発揮できにくい。その点、大型化した中学校の教科書の中には、教師の裁量ができるような提示の仕方がみられ、今後の動向に注目したい。

一つは、いわゆる教科書問題にかかわることである。昭和30年夏から秋にかけても、一大社会問題になったが、昭和54年頃から再び教科書攻撃が始まった。国語科においても、「おおきなかぶ」「かさこじぞう」をはじめとする民話教材、「一つの花」「川とノリオ」などの戦争児童文学教材などがその攻撃対象とされ、一部では差し替え問題もおこった。これらの教材を守りぬくという視点からだけでは問題は解決しないのはもちろんだが、教科書を、真に国民のための、学習者のためのものとするためには、この不当な教科書攻撃にどう対応していくかが今後とも大きな課題といえる。

(滋賀大学教育学部教授・国語科教育)

彦根藩校弘道館源氏物語資料について

中川 則孝

滋賀大学附属図書館教育学部分館に残る彦根藩校弘道館蔵書についてであるが、『滋賀大学附属図書館教育学部分館情報 図書館だより・きょういく（2007（平成19）年8月1日発行）』掲載の本学教授・木全清博先生の論文によると、「彦根藩校弘道館蔵書の資料類は、教育学部前身の滋賀県師範学校の図書館から引き継ぐ希覯本（きこうほん）であり、彦根藩が廃藩置県後、彦根県 長浜県 犬上県 滋賀県と変遷するなかで、滋賀県学務課から師範学校附属書籍縦覧所に管轄が移された蔵書類である。戦前においては、滋賀県立の師範学校蔵書として保存管理され、1943（昭和18）年に滋賀師範学校が官立（国立）になるとともに、資料は国立に移管された。戦後の1949（昭和24）年に滋賀大学開学により、学芸学部図書館の蔵書となった。」のである。

2006（平成18）年度までは、旧教科書の展示に併せて、弘道館蔵書の一部（『近江名所図絵』、『東海道名所図絵』、伴蒿蹊『閑田耕筆』、滋賀県の管内地図など）が部分的に展示に供されてきたが、組織だつて弘道館の蔵書資料を公開展示することはなかった。

2007（平成19）年度に弘道館蔵書最初の展示を行い、『孟子』、『詩本義（詩経本義）』、『竹取物語抄』、『源氏物語評釈』、『康熙字典』、『四書集註大全』、『井伊傳記』、『浅井三代軍記』、『細見新補 近江国大絵図』、『近江国全図』などの藩校弘道館の独自性を生かした蔵書の展示を行った。

おりしも2008（平成20）年度は、源氏物語千年紀にあたることから、弘道館蔵書の中から源氏物語の資料を展示することとなった。

以下に、展示資料の中から幾つかの資料について、『滋賀大学附属図書館情報 図書館だより 源氏物語資料展特集号（1990（平成2）年7月20日発行）』掲載の本学名誉教授・山本利達先生の論文を引用させていただき、紹介する。

花鳥餘情（桐壺 松風） 一條兼良撰

『河海抄』の不足を補い、誤りを正すために著した。有職故実詳しく、文意・文脈の理解と、鑑賞的な注がなされ、この傾向は、宗祇や肖柏に受けつがれる。

源氏物語系図 桃華宋央写本

1258（正嘉2）年本の『源氏物語系図』の奥書には、俊成女所持本や定家本の系図のことが見える。現在の系図の諸本を見ると、初期の系図は簡略なもので、次第に詳しく整備されてきたことがわかる。

源氏物語忍草 篠木信定書

『源氏大鏡』や『十帖源氏』より平易な言葉で述べようとしたのが『源氏物語忍草』である。

源氏物語年立 一條兼良撰

「桐壺」の巻で源氏が12歳で元服し、結婚したことを述べて以後、「藤裏葉」の巻

で来年 40 歳になるということが書かれるまで、源氏の年齢について語られていない。そこで「藤裏葉」の巻から逆算して、巻々における源氏の年齢を推定し、「幻」の巻までは源氏の年齢により、「匂宮」の巻以後は薫の年齢によって巻々の位置を年表風整理したもの。

源氏物語評釋 鹿鳴草舎蔵版 萩原廣道著

「花の宴」までのものであるが、主客、照応、伏線、省筆、草子地等 21 項目により、文章論的、構想論的な考察をしており、その読み方は現代にも影響を及ぼしている。

『源注拾遺』 密乗沙門契沖写本

実証的な注で、『湖月抄』の誤りを正し、儒教的教戒説をしりぞけ、本居宣長の「物のあはれ」説への道をひらいている。

『湖月抄』 北村季吟

本文の頭注と傍注に、『細流抄』を拠り所に、孟津を重んじ、河海、花鳥の要所を取り入れ、弄花、明星を拾い、如庵説を取り入れ、自説を加えて『湖月抄』を成した。1945（昭和 20）年頃まで、『源氏物語』のテキストとして用いられることとなった。

（参考文献）

- 1 『滋賀大学附属図書館情報 図書館だより 源氏物語資料展特集号』
1990（平成 2）年 7 月 20 日発行
- 2 『滋賀大学附属図書館教育学部分館情報 図書館だより・きょういく』
2007（平成 19）年 8 月 1 日発行

（滋賀大学図書情報課情報管理サービス第二係長）

『国語教科書 - 明治から現代まで - 及び 源氏物語資料展』

期間 平成 20 年 8 月 1 日（金）～ 8 月 8 日（金）
午前 10 時～午後 4 時

会場 滋賀大学附属図書館教育学部分館 2 階閲覧室

期	教科書名	編著者	出版年または検定年	整理番号
国定以前の(検定期)の国語教科書	繪入智慧の環	古川正雄	1870(明治3)～1872(明治5)年	50-2,3
	ちゑのいとぐち	古川正雄	1871(明治4)年	50-5
	ヨミカタ 読書入門	文部省編輯局	1886(明治19)年	2-67
	尋常小学読本	文部省編輯局	1887(明治20)年	2-34-1-1,2
	帝国読本		1892(明治25)年	2-45
	尋常国語読本		1900(明治33)年	2-1-1-1,2
	国語読本 尋常小学校用		1900(明治33)年	2-6
第1期国定国語教科書	尋常小学読本 一～八 復刻版	文部省	1903(明治36)～1904(明治37)年	
第2期国定国語教科書	尋常小学読本 卷一～十二	文部省	1909(明治42)年～1910(明治43)年	2-52,53,54
第3期国定国語教科書	尋常小学国語読本 卷一～十二 復刻版	文部省	1919(大正7)～1926(大正14)年	375.9 J 52 1-12
第4期国定国語教科書	小学国語読本 尋常科用 卷一～十二 復刻版	文部省	1933(昭和8)～1939(昭和14)年	375.9 Sh 95 1-12
第5期国定国語教科書	ヨミカタ 一、二 よみかた 三、四 復刻版	文部省	1941(昭和16)年	3-6
	初等科国語 一～八 復刻版	文部省	1942(昭和17)年～1943(昭和18)	1-15-1,2
戦後直後の墨塗り前国語教科書	ヨミカタ 二 復刻版	文部省	1941(昭和16)年	
	よみかた 四 復刻版	文部省	1941(昭和16)年	
	初等科国語 二、四、六、八 復刻版	文部省	1942(昭和17)年～1943(昭和18)	
戦後直後の墨塗り後国語教科書	ヨミカタ 二 復刻版	文部省	1941(昭和16)年	
	よみかた 四 復刻版	文部省	1941(昭和16)年	
	初等科国語 二、四、六、八 復刻版	文部省	1942(昭和17)年～1943(昭和18)	
暫定国語教科書	ヨミカタ 一、二 よみかた 三、四 復刻版	文部省	1946(昭和21)年	375.9 Mo 31 1
	初等科国語 一～八 復刻版	文部省	1946(昭和21)年	375.9 Mo 31 1

期	教科書名	編著者	出版年または検定年	整理番号
第6期国定国語教科書	こくご 一～四 復刻版	文部省	1947(昭和22)年	375.9 Mo 31 5-7
	国語 第三学年～第六学年 復刻版	文部省	1947(昭和22)年	375.9 Mo 31 5-7
第1期検定国語教科書	まことさんはなこさん 復刻版	文部省	1949(昭和24)年	375.9 Mo 31 5
	いなかのいちにち 復刻版	文部省	1949(昭和24)年	375.9 Mo 31 5
	いさむさんのうち 復刻版	文部省	1949(昭和24)年	375.9 Mo 31 5
第3期検定国語教科書	しょうがくこくご 小学国語	大阪書籍	1963(昭和38)年	3A10 1960 3
第5期検定国語教科書	あたらしいこくご 新しい国語	東京書籍	1979(昭和54)年	3A10 1979 2
	こくご 国語	光村図書	1979(昭和54)年	3A10 1979 38
	しょうがくこくご 小学国語	日本書籍	1979(昭和54)年	3A10 1979 1
	しょうがくこくご 小学国語	教育出版	1979(昭和54)年	3A10 1979 17
	しょうがっこうこくご 小学校国語	学校図書	1979(昭和54)年	3A10 1979 11
第6期検定国語教科書	こくご 国語	光村図書	1991(平成3)年	3A10 1991 38
	わたしたちのしょうがくこくご わたしたちの小学国語	日本書籍	1991(平成3)年	3A10 1991 1
	しょうがくこくご 小学国語	大阪書籍	1991(平成3)年	3A10 1991 3
	あたらしいこくご 新しい国語	東京書籍	1991(平成3)年	3A10 1991 2
	しょうがっこうこくご 小学校国語	学校図書	1991(平成3)年	3A10 1991 11
	新版こくご 新版国語	教育出版	1991(平成3)年	3A10 1991 17
第7期検定国語教科書	わたしたちのしょうがくこくご わたしたちの小学国語	日本書籍	2001(平成13年)	3A10 2001 1
	あたらしいこくご 新しい国語	東京書籍	2001(平成13年)	3A10 2001 2
	しょうがくこくご 小学国語	大阪書籍	2001(平成13年)	3A10 2001 3
	みんなと学ぶしょうがっこうこくご みんなと学ぶ小学校国語	学校図書	2001(平成13年)	3A10 2001 11
	こくご 国語	光村図書	2001(平成13年)	3A10 2001 38

期	教科書名	編著者	出版年または検定年	整理番号
現在使用 の小学校 国語教科 書	ひろがることば しょうがくこくご ひろがることば 小学国語	教育出版	2004(平成16年)	3A10 2004 17
	新編あたらしいこくご 新編新しい国語	東京書籍	2004(平成16年)	3A10 2004 2
	しょうがくこくご 小学国語	大阪書籍	2004(平成16年)	3A10 2004 3
	みんなと学ぶしょうがっこうこくご みんなと学ぶ小学校国語	学校図書	2004(平成16年)	3A10 2004 11
	こくご 国語	光村図書	2004(平成16年)	3A10 2004 38
現在使用 の中学校 国語教科 書	伝え合う言葉 中学国語	教育出版	2005(平成17年)	3B10 2005 17
	新編新しい国語	東京書籍	2005(平成17年)	3B10 2005 2
	現代の国語	三省堂	2005(平成17年)	3B10 2005 15
	中学校国語	学校図書	2005(平成17年)	3B10 2005 11
	こくご 国語	光村図書	2005(平成17年)	3B10 2005 38
現在使用 の高校国 語教科書	新編国語表現I	明治書院	2002(平成14年)	3C10 2002 117
	国語表現I	教育出版	2002(平成14年)	3C10 2002 17
	国語表現I	東京書籍	2002(平成14年)	3C10 2002 2
	精選国語表現II	明治書院	2003(平成15年)	3C10 2003 117
	現代文	右文書院	2003(平成15年)	3C10 2003 142
	国語表現II	教育出版	2003(平成15年)	3C10 2003 17
	高等学校国語表現II	第一学習社	2003(平成15年)	3C10 2003 183
	国語表現II	東京書籍	2003(平成15年)	3C10 2003 2
	新編現代文	大修館書店	2003(平成15年)	3C10 2003 50
	精選現代文 2	明治書院	2004(平成16年)	3C10 2004 117
	新選現代文	右文書院	2004(平成16年)	3C10 2004 142
	展望現代文	筑摩書房	2004(平成16年)	3C10 2004 143
	現代文 2	東京書籍	2004(平成16年)	3C10 2004 2

期	教科書名	編著者	出版年または検定年	整理番号
現在使用 の高校国 語教科書	現代文 2	大修館書店	2004(平成16年)	3C10::2004::50
	新精選国語総合	明治書院	2006(平成18年)	3C10::2006::117
	精選国語総合 改訂版 現代文編	筑摩書房	2006(平成18年)	3C10::2006::143
	精選国語総合 改訂版 古典編	筑摩書房	2006(平成18年)	3C10::2006::143
	国語総合 改訂版	筑摩書房	2006(平成18年)	3C10::2006::143
	国語表現I 改訂版	三省堂	2006(平成18年)	3C10::2006::15
	高等学校国語総合 改訂版	三省堂	2006(平成18年)	3C10::2006::15
	新編国語総合 改訂版	三省堂	2006(平成18年)	3C10::2006::15
	明解国語総合	三省堂	2006(平成18年)	3C10::2006::15
	国語総合 改訂版	教育出版	2006(平成18年)	3C10::2006::17
	新国語総合 改訂版	教育出版	2006(平成18年)	3C10::2006::17
	国語表現I 改訂版	教育出版	2006(平成18年)	3C10::2006::17
	高等学校国語総合 新訂 現代文編	第一学習社	2006(平成18年)	3C10::2006::183
	高等学校国語総合 新訂 古典編	第一学習社	2006(平成18年)	3C10::2006::183
	高等学校国語総合 改訂版	第一学習社	2006(平成18年)	3C10::2006::183
	高等学校標準国語総合 改訂版	第一学習社	2006(平成18年)	3C10::2006::183
	高等学校新編国語総合 改訂版	第一学習社	2006(平成18年)	3C10::2006::183
	高等学校国語表現I 改訂版	第一学習社	2006(平成18年)	3C10::2006::183
	展開国語総合 改訂版	桐原書店	2006(平成18年)	3C10::2006::212
	発見国語総合	桐原書店	2006(平成18年)	3C10::2006::212
	国語表現I 改訂版	京都書房	2006(平成18年)	3C10::2006::218
	新編国語総合 改訂版	大修館書店	2006(平成18年)	3C10::2006::50
新精選現代文	明治書院	2007(平成19年)	3C10::2007::117	

期	教科書名	編著者	出版年または検定年	整理番号
現在使用 の高校国 語教科書	新精選現代文 1	明治書院	2007(平成19年)	3C10 2007 117
	精選現代文 改訂版	筑摩書房	2007(平成19年)	3C10 2007 143
	国語表現II 改訂版	三省堂	2007(平成19年)	3C10 2007 15
	精選現代文 改訂版	教育出版	2007(平成19年)	3C10 2007 17
	高等学校新編現代文 改訂版	第一学習社	2007(平成19年)	3C10 2007 183
	新編現代文	東京書籍	2007(平成19年)	3C10 2007 2
	展開現代文 改訂版	桐原書店	2007(平成19年)	3C10 2007 212
	国語表現II 改訂版	京都書房	2007(平成19年)	3C10 2007 218
	新現代文 改訂版	大修館書店	2007(平成19年)	3C10 2007 50
弘道館源 氏物語資 料	源氏物語 湖月抄 雲隠説			国書 1-1-3
	花鳥餘情(桐壺 - 松風) 1~5	一條兼良撰		国書 1-25
	源語秘決抄	一條兼良撰,小原君雄写本	1520(永正17)年 1800(寛政12)年写本	国書 1-30
	源氏物語系図	桃華宋央写本	1550(天保19)年	国書 1-31
	源氏物語餘釋	萩原廣道纂注		国書 1-32-1
	源氏物語忍草 1~5	篠木信定書		国書 1-32-2
	源氏物語年立 上、下	一條兼良撰		国書 1-33
	源氏物語評釋 首巻1,2 1~4 鹿鳴 草舎蔵板	萩原廣道著	1852(嘉永6)年 1854(安政元)年	国書 1-34
	源氏物語 表白	釈聖覚撰		国書 1-35
	源氏物語 語釋			国書 1-36
	源注拾遺 1~6	密乘沙門契沖写本	1696(元禄9)年	国書 1-37-1,2
	湖月抄 目録,1~11,13~53	北村季吟	1673(延寶元)年	国書 1-49-1~6
源氏物語忍草 1~5			国書 1-154	